

マルクス・エンゲルス選集

第四卷

革命と反革命

ドイツ国憲法戦役

小ブルジョア民主主義との闘争

階級裁判における共産主義者

一八四八年の革命—ドイツ

マルクス=エンゲルス選集

第 4 卷

マルクス=レーニン主義研究所編

一八四八年の革命

——ドイッ——

大月書店刊

一九五三年十月三十日 発行

第四卷

定價 四二〇円

編集者

マルクス・レーニン主義研究所

発行者

東京都文京区本郷一丁目一五番地
小林直衛

印刷者

東京都文京区柳町二六番地
三晃印刷株式会社

発行所

東京都文京区
本郷一丁目一五番地

大月書店

電話 小石川(92)三〇九一
振替・東京一六三八七番

凡 例

一 原註は（原註Ⅰ）と、異文考証等についての編集者（訳者）による註は*印で標示し、その註釈文はそれぞれ註を必要とする個所の直後に、訳者による註は（Ⅰ）（Ⅱ）等と標示し、その註釈文は（註Ⅰ）（註Ⅱ）等として各論文、手紙の末尾に一括し、なお簡単な訳註は「……」として六号活字で本文中に挿入した。原文にある挿入句は（……）で挿入した。

二 原文で一般的に使用されている國語以外の原語は、原則としてその訳語の直後に（……）で挿入した。

三 引用文は「……」で、引用文中の再引用箇所は『……』でしめした。

四 著書、新聞、雜誌その他の出版物の書誌名または著作題名等は『……』でしめした。

五 原文中斜字体または隔字体（イタリック）（グレイズ）になっている箇所は、訳文ではゴチック活字または傍点をつけて標示した。

六 地名、人名はなるべく現地の発音にちかく表記することを原則としたが、従来の慣用をも考慮した。

七 手紙は主題に関係ある部分の抄訳にとどめ、文調も手紙であることに格別の考慮をはらってはいない。

八 本選集の訳文は、それぞれの訳者が担当し、校訂者によって原典と各國語訳とを逐語的に参照し、内容上と用語用上との校訂がなされ、文調にも一應の統一がはかられたうえ、なったものである。

一八四八年の革命——ドイツ

目次 第四卷

ドイツ革命の決算

革命と反革命（エンゲルス）

一 革命前夜のドイツ	一
二 プロシヤ國家	一七
三 その他のドイツ諸國	三三
四 オーストリア	四一
五 ウィーンの反乱	五一
六 ベルリンの反乱	五七
七 フランクフルトの國民議會	六四
八 ボーランド人、チェック人およびドイツ人	七二
九 汎斯拉ヴ主義——シュレスウイヒルホルシュタイン戦争	七九
一〇 パリの蜂起——フランクフルト議會	八五
一一 ウィーンの反乱	九三

二	ウィーンへの強襲——ウィーンの内應	101
一三	プロシヤ議會——ドイツ國民議會	116
一四	秩序の回復——國民議會と二院制議會	124
一五	プロシヤの勝利	133
一六	議會と諸政府	139
一七	反 乱	145
一八	小 企 業 者	153
一九	反乱の終末	161
	ドイツ國憲法戰役(エンゲルス)	169

一	ライン・プロシヤ	174
二	カールスルーエ	181
三	プ ー ル ツ	190
四	共和國のために死することこそ	243

付	エンゲルスからイエニ・マルクスへの手紙(一八四九年七月二十五日)	305
---	----------------------------------	-----

小ブルジョア民主主義との闘争

共産主義者同盟への中央委員会の挨拶	一	(マルクス・エンゲルス)	三二七
共産主義者同盟への中央委員会の挨拶	二	(マルクス・エンゲルス)	三三二
万国革命的共産主義者協会規約		(マルクス・エンゲルス)	三三三
ウィリヒ・シャッパー派について		(マルクス)	三四四

階級裁判における共産主義者

『新ライン新聞』の出版法違反訴訟		(マルクス)	三七七
公務執行妨害教唆罪による巡回裁判		(マルクス)	三七九
ケルン陪審法廷にたつカール・マルクス		(エンゲルス)	四二二
ゴットフリート・キンケル		(エンゲルス)	四二五
最近のケルンの裁判		(エンゲルス)	四三〇
ケルン共産党裁判のばくろ		(マルクス)	

一 発端			四三九
------	--	--	-----

二 デイーツの記録			四四五
-----------	--	--	-----

三 シェルヴァールの陰謀			四五〇
--------------	--	--	-----

四	議事録原本	四七一
---	-------	-----

五	「赤色問答」の通知狀	五〇八
---	------------	-----

六	ウイリヒロシヤツパー派	五一二
---	-------------	-----

七	判決	五一九
---	----	-----

付 一八七五年ライプツイヒ版からの増補

一	カール・マルクス著『フオークト氏』の付録第四	五二八
---	------------------------	-----

二	マルクスの跋文	五四三
---	---------	-----

一八四八年ドイツ革命にかんする手紙から

一	エンゲルスからマルクスへ（一八五一年二月十三日）	五四九
---	--------------------------	-----

二	マルクスからエンゲルスへ（一八五一年七月十三日）	五五一
---	--------------------------	-----

三	エンゲルスからワイデマイヤーへ（一八五三年四月十二日）	五五四
---	-----------------------------	-----

ドイツ革命の決算

革命と反革命 (エンゲルス)

一 革命前夜のドイツ

——『ニューヨーク・デイリー・トリビュン』
一八五一年十月二十五日号所載——

ヨーロッパ大陸における革命劇の第一幕はおわった。一八四八年の台風いぜんの「ありし日の権力」が、いま一度「当代の権力」としてかえりさいている。そして、いくらかでも人氣をはくしたひとところの支配者たち、臨時政府員、三統領官、執政官〔統領官、執政官はフランス第一革命のころの革命政府の首長の官名〕たちは、いまや代議士、民政委員、軍政委員、知事、裁判官、將軍、將校、兵士などの一門郎党もろともに、異國の岸辺にうちあげられ、「海路はるかに」イギリスやアメリカへ「はこびさられて」、そこにヨーロッパ委員会、中央委員

会、國民委員会とかの「領地なき⁽²⁾」(in partibus infidelium) 新政府を組織し、彼らほど仮空的ではない、どの主権者のものにもまけないおごりかな宣言文で、自分たちの到來をつげしらせている。

大陸の革命党——というよりむしろ革命的諸党——が戦線の全地点でこうむった敗北以上にみじめな敗北は、考えることができない。だが、それがどうしたというのだ？ イギリスの市民階級がその社会的・政治的支配權をうるためにおこった闘争は四十八年にわたり、そしてフランスの市民階級がおこった闘争は四十年にわたる比類のない闘争ではなかったか！⁽³⁾ そしてまた、復活された君主制が、いまこそかつてないほど堅固な足場になつていると、そう自分で考えたその瞬間こそ、実際には市民階級の勝利がもっともまぢかにせまっていたときではなかったか？ 革命は少數の煽動家の惡意によっておこされると考えた迷信の時代は、もうとつくのむかしにすぎさつてゐる。革命的動乱がおこるところには、かならずそのかげに老朽した諸制度のためにさまたげられてみたされないでゐるなんらかの社会的必要がひそんでゐるということは、いまではだれしらぬものとなつてゐる。あるいはこの必要は、いまのところまだ即時成功を保証するほどに痛切なものでも、あまねく感じられてゐるものでもないかもしれない。けれどもこれを暴力で抑圧しようとするときは、そのたびごとにかえてその必要はますますつよくあらわれるばかりであり、ついには、それをいましめてゐる束縛を破碎してしまふだろう。そこでいま吾々がまけたとすれば、吾々としてはいま一度はじめからやりなおすだけのことである。そしてさいわいなことには、運動の第一幕がおわつてその第二幕がはじまるまでのあいだにあたえられた、たぶんほんとうにみじかい幕合が、ひじょうに必要な仕事をかたずける時間を吾々にあたえてくれる。それは、最近の爆発がおこらざるをえなかつたしまた敗北せざるをえなかつたその諸原因を研究するという仕事である。これらの原因は、指

導者中のだれかの偶然の努力や才能や欠点や誤謬やうらぎりなどにもとめるべきではなく、動乱をおこしたそれ
ぞれの國民の一般的な社会状態と生活條件とにもとめるべきである。一八四八年の二月と三月の突発的な運動が
個々の個人のしわざではないこと、各國の多くの階級が多かれすくなかれはつきり理解し、またきわめて明確に
感知していた國民的な要求と必要とが、自然発生的に、おさえがたい力でここにほとばしりてたものであること
は、あまねく承認されている事実である。ところがその一方に反革命の成功の原因をたずねるときは、どの方面
からうけとるのも、だれそれ氏が人民を「うらぎった」のだとか、市民なにがしがうらぎったのだとかいうおき
まりの答である。この答はその場合の事情によって、あたっていることもあたっていないこともあろう。しかし
どういふ場合にも、この答はなんにも説明しない。——それは、どうして「人民」がそのようにあまんどてうら
ぎられるままになっていったかということさえも説明しない。そして市民なにがしは信頼にあたいたしないうた
った一つの事実の知識を一枚看板としているような政党の前途は、まったく心ぼそいものである。

革命的動乱がなぜおこり、またなぜ鎮圧されたか、この双方の原因を探究し、あきらかにすることは、このほ
かまた歴史的な見地からみてこのうえなく重要である。革命の船を岩礁のあいだにみちびきいれて難破させたも
のがマラスト⁽⁵⁾であったとか、ルドリュウローラン⁽⁶⁾であったとか、ルイ・ブラン⁽⁷⁾であったとか、あるいは「フラン
ス」臨時政府のその他の閣僚であったとか、または閣僚の全体であったとかの、こうしたちっけな、個人的な
口論やとがめだてのすべて、こうした甲論乙駁のすべて——それらは、これらすべての種々の運動をはるか遠く
からながめたので、個々の行動の詳細までみきわめることのできなかつたアメリカ人やイギリス人にとって、ど
ういふ興味がありうるだろうか、またどういふ説明を彼らにあたえうるだろうか？ その大半は善にも悪にもま

たたく凡庸の才能しかもたない十一人の人間⁽⁸⁾が、三千六百万人の一國民を三ヵ月のうちに破滅させることができたなどということは、この三千六百万人もまた右の十一人におとらないくらい目さきのみえない人々であったのではないが、正氣の人間にはけっして信じられないであろう。しかし、どうしてこの三千六百万人が、たとい薄明のなかをなかば模索してにもせよ、自分のすすむべき道を自分できめなければならぬ必要に突然にせまられるようなことがおこったのか、またどうして彼らがそののち道にまよって、そのむかしの指導者たちに一時的に以前の指導的地位にかえることをゆるしてしまったのか、問題はまさにこの点にある。

そこで吾々が、いま一八四八年のドイツ革命がなにゆえにおこらざるをえなかったか、そしてまた同様に一八四九年と一八五〇年におけるその一時的な鎮圧がなにゆえにまぬかれえないものであったか、その諸原因を『トリビュン』紙の読者に説明しようとするにしてみても、読者は、吾々がドイツにおこった諸事件の完全な歴史を提供することを期待してはならない。一見して偶然的で、ばらばらで、不調和のように思われる諸事実のあの乱雑なよせあつめのなかで、どの部分が世界史の一部をなすべくさだめられているかは、こんごの諸事件と後世の判断とがきめるであろう。いまはまだそのような課題に手をつける時期はきていない。吾々はできることがらの範圍にとどまらなければならない。そしてもし吾々が、この運動のおもな諸事件、そのおもな推移を説明することができるならば、そしておそらくさして遠くないうちにおこると思われるつぎの爆発がドイツの人民をどの方向にうごかすであらうかをするための手びきとしてやくだちうるような合理的な諸原因を、たしかな事実にもとずいてみい出すことができるならば、それで吾々は満足しなければならぬ。

それではまず第一に革命の勃発した当時のドイツはどういう状態にあったか？

あらゆる政治組織の土台である人民の各種階級の構成は、ドイツでは、ほかのどの國の場合よりも複雑であった。イギリスやフランスでは、封建制度は大都市、とくに首都に集中した有力で富裕な市民階級によってまったく破壊されたか、すくなくともイギリスの場合のように二三のとるにたらない形態に制限されたのに、ドイツの封建貴族はこれに反してその古來の特權の大部分をそのままに保持していた。封建的な領地制度がほとんどいたるところにおこなわれていた。領主は彼らの小作人にたいする裁判權さえも保持していた。彼らは、政治上の特權と王侯を支配する權利とはうばわれていたけれども、自分の領地内の農民にたいしてはその中世的な支配權をほとんど完全にたもっており、また免稅の特權さえもっていた。各地方によって封建制度のさかえている度合はまちまちであったが、それがまったく破壊されたところはライン河の左岸をのぞいてどこにもなかった。この封建貴族は、当時はなはだ数多く、なかにはひじょうに富裕なものもあり、公けに國內第一の「身分」であるとみなされていた。政府の高官はそのうちからでたし、軍隊の將校もほとんどまったく貴族の出身であった。

ドイツのブルジョアジーは、富力の点でも集中度でも、フランスまたはイギリスのブルジョアジーに遠くおよばなかった。ドイツ古來の製造工業は、蒸氣力が應用され、またイギリスの製造工業が急速に支配權をひろげてきたために、すでにうちほろぼされていた。もっと近代的な製造工業は、ナポレオン⁽⁹⁾の大陸封鎖のもとに充足して、國內の種々の地方に建設されていたが、これらはふるい工場制手工業の没落をつぐなりものではなく、また貴族以外のものの富や權力がすこしでも拡大することを嫉視していたドイツ連邦の諸政府を強制して、製造工業の要求をかえりみさせるほどの強大な工業界勢力をつくるにはふじゅうぶんであった。フランスが五十年にわたる革命と戦争をきりぬけてその絹工業を首尾よくまもりぬいたとすれば、ドイツはそれとおなじ期間にその古來

つたわる製麻業をあらかたうしなつてしまつた。そのうえ工業地帯の数はすくなく、たがいに遠くかけへだたつていて、その位置も内陸おくふかにあり、その輸出入にはおもにオランダやベルギーのような外國の港を利用してゐたので、これらの工業地帯と北海やバルト海にそつた大海港都市とのあいだには、ほとんど、あるいは全然共通の利害がなかつた。とりわけパリやリヨン、ロンドンやマンチエスターのような、商工業の大中心地をつくりだすことができなかった。ドイツの製造工業がこのようにおくれた原因はいろいろあるが、つぎの二つをあげるだけでそれをじゅうぶん説明するであらう。その一つは、当時世界通商の大公道となつてゐた大西洋から遠くへだたつてゐるこの國の地理上の位置の不利なこと、もう一つは十六世紀いらいこんにちに至るまで、ドイツがひっきりなしに戦争にまきこまれ、しかもその戦争が國內でたたかわれてきたという事情である。イギリスのブルジョアジーが遠く一六八八年いらい享有しており、そしてフランスのブルジョアジーが一七八九年に奪取した政治的支配權をドイツの市民階級が獲得するのをさまたげたものは、じつにこの数が不足してゐたこと、とりわけいくらかでも集中された数が不足してゐたことであつた。それにもかかわらず、一八一五年いらい⁽¹⁰⁾ドイツの市民階級の富はたえず増加し、それにとりなつてその政治的重要性もたえず増大しつづけた。連邦諸國の政府も、すくなくとも市民階級のより直接的な物質的利害にたいしては、いやいやながら屈從するほかにしかたがなかつた。そこで、つぎのようにいつてもよいくらいであつた、——以前に諸小國の憲法で市民階級にたいしてゆるされてゐた政治的勢力は、一八一五年から一八三〇年までと、一八三二年から一八四〇年までと、この二つの政治的反動期⁽¹¹⁾にふたたび彼らの手からとりあげられたけれども、そのうしなわれた勢力の一片一片は、なにかもっと實際的な利益が彼らにゆるされたことによつてつぐなわれた、と。市民階級が政治的敗北をこうむるたび

ことに、商業立法の方面での勝利がこれにつづいた。そしてたしかにドイツの商工業者にとっては、一八一八年のプロシヤの保護関税と関税同盟 (Zollverein) の成立⁽¹²⁾とは、どこかの矮小公國の二院制議會にすわって大臣の不信任を表明するあやしげな権利より、ずっと大きなねうちがあった。けだしこんな不信任投票は、当の大臣たちは笑いとばしていたのだからである。このように富がまし、商業が拡張するにつれて、ブルジョアジーが、自分らのもっとも重大な利益の発達が國の政治的組織のためにさまたげられていることに気がつく段階が、まもなくやってきた。——ドイツが相反する傾向と氣まぐれとをもつ三十六人の王侯のあいだにでたらめに分割されていること⁽¹³⁾、農業とそれに関連のある商業とが封建的な束縛のもとにおかれていること、彼らのあらゆる商取引が無知でさしでがましい官僚どものこうるさい監督をこうむっていること、これがそれである。それと同時に関税同盟の拡大と強化、蒸氣交通機関の普及、國內商業における競争の増大は、諸國、諸州の商業階級をたがいにな近させ、彼らの利害を一樣化し、彼らの力を集中した。このことの自然の結果は、彼らがこぞって自由主義的反政府派の陣營に投じたことと、ドイツの市民階級が政權獲得のための最初の眞剣な闘争に勝利をえたこととであった。この変化は、一八四〇年⁽¹⁴⁾に、すなわちプロシヤのブルジョアがドイツの市民階級の運動の指揮をとったときにはじまるというてよいであらう。一八四〇年から一八四七年にかけてのこの自由主義的反政府運動については、のちにたちかえつてのべることにする。

貴族にもブルジョアジーにもぞくしていない國民の大多數は、都市では小商工階級と労働者から、農村では農民からなっていた。

ドイツでは、階級としての大資本家と大製造業者の発達が制限されていた結果として、小商工階級がきわめて

多数である。大都市では彼らは住民のほとんど過半数をしめており、小都市では、これと勢力をあらそうことも富裕な競争相手がいないために、彼らがまったく圧倒的である。この階級は、すべての近代國家、すべての近代革命でもっとも重要な階級であるが、ドイツではとりわけその重要性が大きく、ここではこの階級が最近の諸國爭中に一般に決定的な役割をえんじた。この階級の性格は、大資本家と大商工業者の階級、ただしくよべばブルジョアジート、プロレタリアすなわち工業労働者階級とのあいだにたっている彼らの中間的な地位によってさだまる。この階級に所屬する個人は、前者すなわちブルジョアジートの地位にあがれながら、ほんのわずかの不運にもたちまち後者すなわちプロレタリアの列になげこまれる。君主國や封建的國家では、宮廷や貴族のひきたてが、この階級の生存のために欠くことのできないものになる。もしこのひきたてをうしなうと、彼らの大部分は破滅するかもしれない。小都市では守備隊、郡政廳、裁判所などが、その随從者たちとあいともなつて、この小商工階級の商賣繁昌の基礎をなしていることがすくなくない。こころみにこれらのものをとりのぞいてみよ。小商人、仕立屋、靴屋、指物師はたちまち没落するであらう。このようにこの階級は、いちだん富裕な階級のなかまにくわわりたいという希望と、プロレタリア、いなそれどころか窮民の地位にさえおちこみはしないかという恐怖とのあいだを——また公務の運営に一口わりこんで自分の利益をはかりたいという希望と、不適當なときに政府反對の声をあげたために、自分たちのいちばんよい顧客をうばう力をもっている点で、自分たちの生殺與奪の権をにぎっているこの政府のいかりをまねいてはならないというおそれとのあいだを、永遠に動搖する。彼らは、すこしばかりの財産をもっているが、その所有のふたしかなことは財産の額に反比例する。この階級の見解ははなはだ動搖的である。強大な封建政府あるいは君主制政府のもとでは、へりくだって、はいつくばわん